

海を活かす「魅せる漁業」

松崎町漁業協同組合雲見青壮年部
高橋英男

1 地域および漁業の概要

松崎町は伊豆半島西海岸の南西部に位置しています。松崎町の最も南にあるのが私たちの住む雲見地区です（図 1）。雲見地区は温暖な気候や変化の富んだ海岸線に恵まれている上、温泉地であるため観光地としてもにぎわっています。また雲見地区では、30年以上前からダイビングが行われており、伊豆半島でもダイビングの歴史のあるところです。ダイナミックな海底地形や観察できる魚種の豊富さで伊豆でも有数のダイビングスポットとなっています。

松崎町漁業協同組合は正組合員381名、準組合員161名からなり、1998年度の水揚量は95トン、水揚金額は6,142万円でした（表 1）。雲見地区の漁業の主体は採貝藻・刺網等の磯根漁業で、イセエビ、サザエ等の貝類が主要な対象魚種となっています。

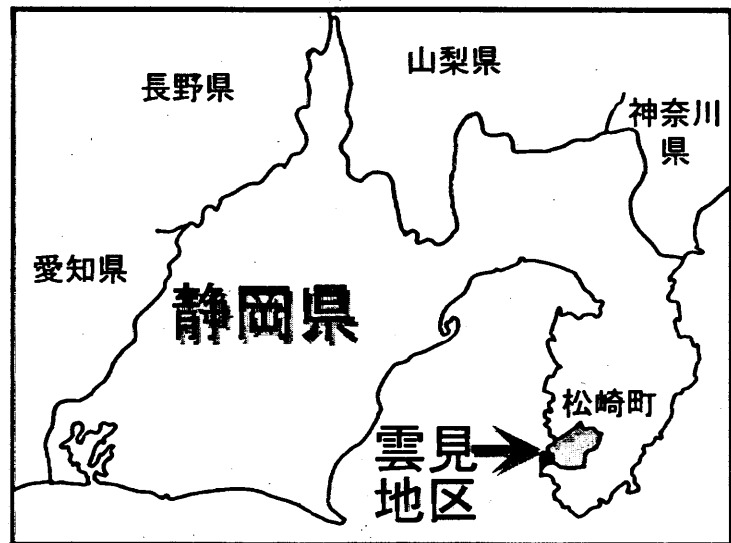


図 1 静岡県松崎町雲見地区の位置

表 1 平成 10 年度松崎町漁協水揚状況

魚 種 名	水揚量(t)	水揚金額(万円)
ト ビ ウ オ	11.2	217.1
マ ル ソ ウ ダ	7.7	36.4
ヒ ラ ソ ウ ダ	6.4	178.2
ス ル メ イ カ	6.4	263.1
カ ツ オ	5.5	254.9
そ の 他	58.1	5192.4
計	95.3	6142.1

2 研究集団の組織および運営

松崎町漁協雲見青壮年部は、1978年に結成され現在50歳未満の部員32名で構成されています。部員は主に採貝藻漁業や刺網漁業に従事しており、民宿を兼業している部員も半数ほどいます。現在まで、カジメ群落の造成、サザエの資源管理、イセエビの標識放流、アワビの人工種苗放流などの活動を行ってきました。

3 活動課題選定の動機

近年余暇を楽しむという生活スタイルの変化により、海洋レクリエーション人口は増加

傾向にあります。しかし漁業と海洋レクリエーションとの間で海の利用についての法律やルールが確立していないため各地で様々な摩擦が生じています。一方でホエールウォッチングやダイビング等の事業を本格的に取り込み、従来の「獲る漁業」に加え、「魅せる漁業」により地域活性化を図ろうとする動きがあります。また都市住民との交流の場として漁村の存在が重要視され、海的环境保全や環境教育の場としての役割も漁村に期待されてきています。

青壮年部が今回の活動に取り組む以前、ダイバーの密漁や急浮上による航行上の危険などがあり、ダイビングに対して不信感を抱いていました。年々ダイビング利用者数は増加し、漁業とダイビングとの間で海の利用の問題は、より深刻になりました。そこで私たちは、ダイビングを排除するのではなく、漁業とダイビングが雲見の海で共存してくために、青壮年部とダイビングショップの話し合いによる海の利用の共通ルールづくりをしました。またダイビングを活用することによって、漁業生産が減少している（図2）漁村の活性化や環境保全を目指しました。

4 実践活動状況および効果
 漁業とダイビングが共存するため一番重要なことは、共通のルールを作ることです。具体的には、ダイビング時間、ダイビング海域の指定、ダイビング中の採捕の禁止など海の利用のルールを、青壮年部と雲見地区内のダイビングショップとで話し合ってきました。

4月から9月は潜水時間が8:30~16:00ですが、イセエビ刺網の漁期である10月から3月の間は、イセエビ漁の邪魔にならないように

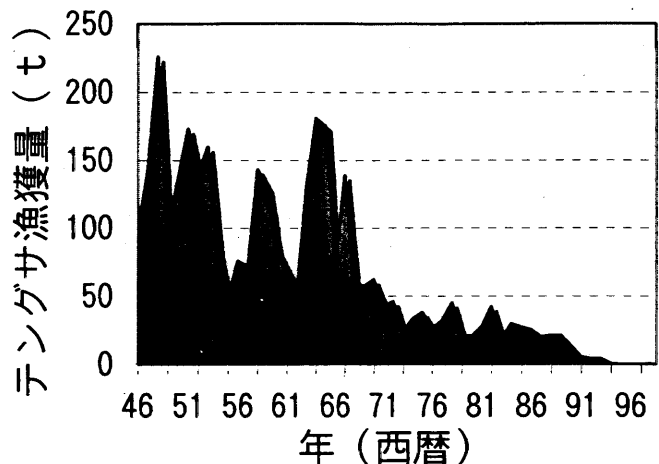


図2 雲見におけるトングサ漁獲量の推移



図3 雲見の海域

潜水時間が8：30～15：30となっています。

1982年に潜水海域が、それまで牛着岩までだったのが黒崎まで拡大されました（図3）。このときには、漁場として利用している漁業者と新しいダイビングスポット開設を要求するダイビングショップの間に、青壮年部がはいり調整役を担いました。

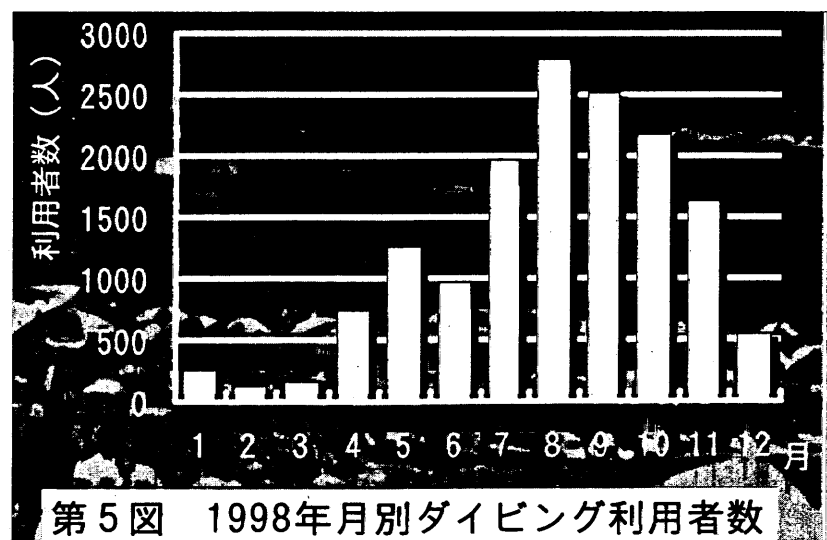
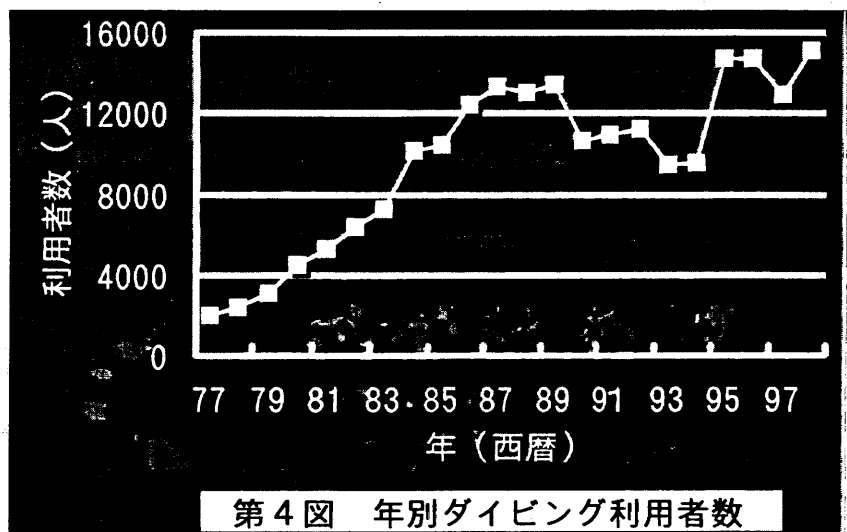
ダイビングショップとの係わりが深くなるにしたがって、ダイビングショップ側の漁業に対する理解も深まってきました。以前は赤井浜からのダイビングをしていましたが、赤井浜は雲見の浜から死角になっており管理が届かず密漁の疑いがありました。ダイビングショップ側も漁業者に密漁の疑念を持たれないようにするため青壮年部と協議しました。その結果、赤井浜からのダイビングを中止し、赤井浜へは雲見の港からボートでダイビングをすることになりました。ダイビングショップにとっても、マナーの悪い一部のダイバーのために一般のダイバー全て疑われてしまうことを考え、赤井浜はボートでのみということに協力しました。こうすれば海への出入り口が雲見の浜からだけになるので密漁が防止できますし、ダイバーも密漁の疑いを持たれないで済みます。

1995年、青壮年部内でもダイバーが密漁しないということが理解されたので青壮年部が漁業者とダイビングショップとの間の調整にはいり、それまで密漁の危険性が高いと禁止されていた夜間のダイビングも、当日の夕方に漁協に届けを出すことで解禁になりました。

このように話し合うことによりお互いの顔が見えるようになり、海を利用する者同士として信頼関係を築ききっかけになりました。共通のルールが浸透したおかげで、ダイバーのマナーも向上し密漁などのトラブルも生じなくなりました。そのうえ、協力関係も生まれてきました。根に引っかかった網を外するときなどはダイビングショップの人たちに協力してもらうこともあります。

青壮年部とダイビング関係者が歩み寄ることによって、雲見でのダイビングは円滑に行われるようになりました。そのおかげでダイビング利用客数も年々増加し、今では年間1万5千人の利用客が訪れています

（図4）。青壮年部員の半数が民宿を兼業しており、安定したダイビング利用客数が民宿



宿泊客数に貢献しています。また海水浴客は7～8月に集中しますが、ダイビング利用者は海水浴シーズン以外の時期にも訪れるため(図5)閑散期の重要な収入源となっています。

さらに、雲見の海的环境保全を両者協力して実践してきました。その一つが10年前から行われている海底清掃です。夏の観光シーズンにきれいな雲見の海を楽しんでもらおうと、毎年海開き前の6月に青壮年部がダイビングショップの協力を得て実施しています(写真1)。青壮年部員とダイビングショップの従業員がスキューバを用いて海底のゴミを拾います(写真2)。最も多い年には900kgのゴミが回収されましたが、毎年の海底清掃によりゴミの量は減少し、今年の回収量は約250kgでした(写真3)。海底清掃のほか青壮年部員がダイビングショップと協力し、港や浜辺の清掃を定期的に行っています。ゴミの内容の大部分は釣り糸、鉛、空き缶です。こうして海底や浜辺の清掃を行うことによって青壮年部とダイビングショップにとっても環境保全が大切であることを再認識し、一般の観光客にもゴミのポイ捨て防止の啓発になることを期待しています。その他にも青壮年部員がダイバーの緊急事態に遭遇した時、適切な処置がとれるように、今年はダイビングショップインストラクターによる人工呼吸法と心臓マッサージの救命訓練研修を行いました(写真4)。この訓練で青壮年部員は、雲見の海を利用する全ての人にとって安全な海にしようという意識を持つようになりました。

5 今後の問題点および波及効果

豊かな海を目指すとともにダイビングスポットとしての雲見の海を魅力あるものに保ち続けていく努力がこれから必要です。海底清掃はその一つにすぎません。青壮年



写真1 海中清掃に参加する雲見青壮年部とダイビング関係者

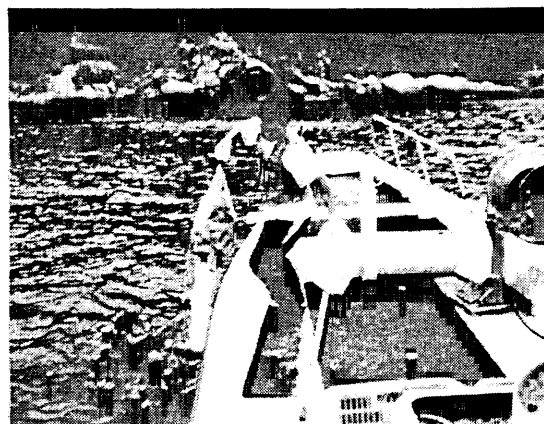


写真2 海底清掃の様子



写真3 99年に回収された250kgのゴミ



写真4 救命訓練に取り組む青壮年部員

部を中心に雲見の海を豊かに保ち続け、魚礁やそだ礁を設置しその周囲を禁漁区にするなど、青壮年部がダイビングショップと協力し新たなアイデアを出していきたいと思います。

10年以上の地道な活動ですが、青壮年部がダイビングを排除せずに歩み寄ろうとする姿勢をとり、ダイビングショップも漁業を尊重することで相互理解を深めることができました。その成果で今ではダイビングが雲見にとけ込んでいます。今回の活動は、必ずしも漁獲量を増加させる直接効果はないかも知れません。しかし、「魅せる漁業」を考えることによって、青壮年部だけでなく漁業以外の人にも雲見の海をきれいにしていこうという意識が芽生え、これからの海の利用と保全・管理について地域で考えるようになり、「海を活かす」きっかけとなりました。

雲見は、地域外との交流も増え、従来の閉鎖的なイメージとは異なる開かれた漁村として都市との交流の場になりつつあります。海底清掃など環境保全を青壮年部が意識していけば、都市住民の方たちに漁村の果たす役割や沿岸環境の大切さを伝えることができるのではないのでしょうか。この機会を活かし都市に住む人々に対してグリーンツーリズムや漁村体験等を通じて、漁村・漁業の役割への理解を積極的に取り組んでいきたいと思っています。

きれいな海は漁業やダイビングだけでなく全ての人々にとってかけがえのない財産です。これからも青壮年部が核となって海底清掃の他にも環境保全活動に地域全体で取り組み、きれいな雲見の海を次の世代に引き継ぎたいと思います。